

教 仏 名 聞

第51号
(発行日)
2014年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

仏 光 照 曜 最 第 一

仏光照曜最第一
光炎王仏となづけたり
三塗の黒闇ひらくなり
大応供を帰命せよ

〈現代語訳〉

(この仏の光明の輝きは第一に勝れているので、光炎王仏と名づける。三塗の迷闇をも照破される。大応供の弥陀をたのみとせよ)

〈語句〉

光炎王仏——諸仏の光明のおよぶことができない勝れた光明の仏。光炎王に同じ。親鸞聖人は『弥陀如来名号徳』に「炎王光と申すは、ひかりのさかりにして、火のさかりにもえたるにたとへまゐらするなり。火の炎の煙なきがさかりなるがごとしとなり。」と述べておられる。

三塗——猛火に焼かれる火塗(地獄)、刀・杖で迫害される刀塗(餓鬼)、お互いに食い合う血塗(畜生)の三悪趣をいう。
大応供——応供は衆生の供

養を受けるに十分に値する尊敬すべきお方のこと。仏の尊称。大の一字を加えて、仏の中で最もすぐれた仏であることと示して阿弥陀仏の別名とされる。

* * *

今回のこのご和讃も七高僧のお一人である中国の曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈』に出ています、

「仏光照曜すること最第一なり。ゆえに仏をまた光炎王と号けたてまつる。三塗の黒闇光啓をこうむる。このゆえに大応供を頂礼したてまつる。」

をそのまま和讃にされたものであります。曇鸞大師のこの言葉は、『仏説無量寿経』の

「この光に遇えば、三垢消滅し、身意柔軟にして、歡喜踊躍し善心をここに生ず。もし三塗・勤苦の処にありてこの光明を見たてまつれば、みな休息することを得て、また苦惱なけん。いのち終わりにて後、みな解脱をこうむる。」

のお言葉に依られたものだと いわれています。この経文の

意味は

「この光に遇う者は、むさぼり、いかり、愚痴の煩惱(三垢)が消えていき、身も心も柔

かくなる。そして喜びに満たされて、悪をつつしみ善に励もうとの思いがおのずと湧いてくる。もし三塗(地獄・餓鬼・畜生)などの苦しみの境涯にあつても、この光明を見たとてまつれば、みな安らぎが与えられ、再び苦悩の境涯にもどることがない。そして迷いのいのちが終わって、みな解脱(さと)りを開き仏にな

らせていただくのである。」
といわれるのであります。

このご和讃の元であるこの経文から、仏の光明のはたらきは「三塗の黒闇」を破り開きたもう意義があるということがよく理解できましよう。そ

れほどの光明の輝けるはたらきでありますから、光明の興盛な徳のさまを「光炎王仏」(炎王光)と讃えられるのであります。

地獄のような苦しみの中にあつても、阿弥陀仏の光明に遇うならば、安らぎが与えられ、ついには一切の束縛の苦しみから解放されること、まことに偉大な光明のはたらきであります。

光明・名号にあえば私たちは、苦悩から解放されて安らぎが与えられ、むさぼりや怒りや自己中心的な思いが次第に除かれて、生きていくことに本當の満足感が与えられ喜びが与えられるのであります。そればかりか、悪をはじ善を行いたいという心がおのずから湧いてくると説かれております。

光炎王仏と説かれる阿弥陀

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (月)

午後二時始

ご講師

芦屋市

片岡 雅子 先生

*なおお十二月二十二日は午前十時より
勤行・法話(念佛寺住職)があります。

仏の光明の徳に浴したいものです。法然聖人とか親鸞聖人とか幾多の妙好人といわれるお方は、こうした光明の功德にすっぱりと身を浴しきられたお方でありましょう。それゆえこの仏説の通りを身に浸みて実感されたと思います。

ここで三塗というのは、地獄・餓鬼・畜生の（三悪道）ともいい、苦の状況の程度により、地獄は最も苦しいところであり、餓鬼やそして畜生は地獄ほどの苦しみはないが、同じく苦の境涯であるといわれています。

また、苦の質によって三悪道に分けられ、地獄は怒りや憎しみや嫉妬などによって、生み出される苦しみの境涯、餓鬼は食欲によって生み出される世界、畜生は自己中心的な愚かな想念（愚痴）によって生じる領域として説かれています。

ただ、三悪道はこの人間世界のなかにおいても、瞋恚や貪欲や愚かさによって生じる状況として説かれることがあり、『仏説観無量寿経』ではイダイケ夫人が、怒れる息子の阿闍世によって幽閉され、その苦しみの中で釈尊に、「閻浮提・濁悪世をばねがわ

ず。この濁悪処は地獄・餓鬼・畜生、盈満して、不善のともがら多し」と云っていますから、人間世界（閻浮提）においても、邪悪によって生み出された苦しみの状況を地獄・餓鬼・畜生として云われることもあるのであります。

実際、現在のシリアの状況のような、非常に苦しい状態を「あたかも地獄のようだ」といったり、儲かるとなるとそこへ群がるのを「餓鬼のようだ」ということがしばしばあります。

要するに苦しく悪しき状況を三つの領域に分けて、地獄・餓鬼・畜生といわれるのであります。ですから、死後に三悪道に墮ちる場合もあれば、この世においても三悪道のよくな状況をつくり出すこともありましよう。

そして日常生活でも、大なり小なり自らが地獄・餓鬼・畜生のような苦しみの闇の中に落ちてしまうことがあります。そういう中で、「三塗・勤苦の処にありてこの光明を見たてまつれば、みな休息することを得る」

との仏のお言葉は、有難いお言葉です。なお（勤苦の処）とは苦しいところという意味

です。

これについて思い出すのは、かつて藤原正遠師がよくおっしゃっていました。

「いづれにも ゆくべき道のたえられば 口わりたもう南無阿弥陀仏、

で、苦しい中に南無阿弥陀仏が出てくださると、一息つけさせていただける」

と。ほんとうにそうですね。困ることややりきれないとき、南無阿弥陀仏が口に一声出てくださると、ほっと一息つけさせていただける。不思議ですね。

そういうことのなかで、自然に阿弥陀仏の大悲のお心が浸透してくださっていくのではないのでしょうか。ですから、困ったらお念仏なのであります。つれなかつたらお念仏なのであります。やりきれなかつたらお念仏なのであります。

まことに煩い悩みはお念仏の助縁なのです。実に有難いではありませんか。

「人生は念仏申さずには生きていくことはできない。念仏申さずには生きられないのが人生である」と先達は申されます。苦しみや不安の多い人生に、お念仏はぴったりとはまるのであります。

腹が立ったら、立ちっぱな

しにせず、それをお念仏の縁としてナムアマミダブツと申すのであります。淋しかったら淋しい思いに留まらないで、お念仏を申すのであります。

むなしい思いが起るなら、それを無理に払おうとせず、むなしい心を縁としてお念仏を申すのであります。不安が起こつたら起こつたまま、不安を無理に押さえようとせずお念仏に転じるのであります。

そこにほっと一息つかせてくださるでしょう。そうすると苦しみや不安の中にも一条の光がさしこんでくるのであります。ほっと一息つくのは、自分には自覚できなくても、「阿弥陀仏はあなたと共にいる、あなたをはなさない。ついているよ」という大悲のささやきが何かしら感じるからではないでしょうか。

真宗の教えを聞いたことがほとんどない人が、よく危機的な状況にでくわした時に、「思わずナムアマミダブツが出た」ということをしばしば聞きます。それはナムアマミダブツの言葉の中には、私たちの方から云うと「助けて」であつても、それは実は「助ける」

「ここにいて」「引き受ける」「連れていく（浄土へ）」と仰せくださる阿弥陀仏の大悲の

御心が南無阿弥陀仏にすでにこもっているからであり、このお心が最初にあるから、そして私たちに先立つて喚びかけておられるから、仏法を聞いたことも無い人の口からも、行きづまったとき思わず「ナムアマミダブツ」と出てくださるのではないのでしょうか。

そして、そういう中で、阿弥陀様の慈愛のお心が知らぬまに浸透していつてくださるのではないのでしょうか。

こういう事をいいますと、「お念仏は救いの手段ではない。そんなことをいうと自力の念仏になる」と思われるお方があるでしょう。それは重々承知の上で云っているのです。

南無阿弥陀仏のお言葉は、阿弥陀仏の「助ける」「引き受ける」の勅命であり、お助けそのものの声であります。ですから、一声でも南無阿弥陀仏を称え、「ナムアマミダブツ」と耳に聞こえる、その一言、一事の処に救いはすでに来て下さっているのです。

ただ、すぐにそれが私たちに受け取れる、すなわち信知できるとはかぎりません。そこでともかくもまず南無阿弥陀仏と親しくなり、それに日

頃接し、称え聞いていきますと、南無阿弥陀仏は、お助けそのもの、阿弥陀仏様そのものであると知らされるのであります。

もちろん、すぐに気がつく人もいますし、なかなか気づかぬ人もあります。けれども、阿弥陀仏の救いはいつでも一人一人のところに只今にとどいてるのです。

そんなわけで、日常において、さまざまなさわりや悩みを縁として、お念仏を申す、そこにほっと一息がつく。そんな中で、「ああこの南無阿弥陀仏様がお助けであった。私とともにいて下さる」と知らされる時、ほっとするだけではなくて、まことの安らぎ、

大いなる慰め（大安慰）が与えられるのであります。それが信心であり安心であります。一時のなぐさめどころか、大悲のお心と離れなくなり、撰取されるのであります。もはや阿弥陀仏と離れることのないであいをさせていただくのであります。それをこのご和讃では「三塗の黒闇ひらくなり」と仰せられるのであります。しよう。

〈黒闇〉というのは、私たちの心のありさまであって、

閉じられて暗く、冷たく、苦しい凡夫の心をいうのです。私自身は自分の心が明るいと思つていても、それは大抵、現在が自分に都合のいい状態の中にある場合であり、縁が来ればとたんに苦しみの底へ放り出されるような不安定な心であります。都合が悪くなれば「どうしてこんな目にあうのか」と嘆き苦しむ状態に、あつという間に堕ちて、そこに留まつてしまうのであります。

私たちは自分の心は結構明るいと思つていても、私たちの心の有様を底の底まで知り抜きたもう阿弥陀様から見られると、私たちの心は〈真つ暗な闇〉のごときものでありましよう。欲求と不足不満と自愛の固まりのごときものな

のではないでしようか。先師から「煩惱に目鼻をつけたのが人間である」とお聞きしましたが、その通りであつて否定できませんね。

阿弥陀仏の光に自分の心があつてなく、自分の心の中に光がさしていないと、心が閉塞されて暗いままなのですね。

そんな黒闇の状態の私の心が、南無阿弥陀

仏を聞くところに、阿弥陀仏の光が入つて下さつて私の閉鎖された暗闇の心が破られ開かれていくのであります。その阿弥陀仏の大悲のはたらきをここでは〈光焰王仏〉と申されているのであります。

この阿弥陀仏に帰命せよ、すなわち「ヨリカカリなさい」、「タノミなさい」と聖人は私たちに勧めくださるのです。

〈大応供〉とは阿弥陀仏を讃えられた別称です。応供とは供養を受けるに値するお方ですが、ここでは諸仏の王である阿弥陀仏のことを〈大応供〉と言われています。

(了)

《住職雑感》

最近、しきりに感じるのは「もう充分生きた」という実感である。「充分に生きたので、まだ生き足りないとか、もの足りないということはない」と、今の自分は思う。しかし、こう言つていてもいざとなると「もともとと生きたい」と思うかも知れない。自分の心はアテにならないから。ともかく、なにか知らぬが、充分生きたように今は感じるのである。こういう感じの元に、「遇いがたくして今遇うことを得たり」というものがあるのかもしれない。そして年老いてくると、祖師の「無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること」(ご和讃)と仰せられるお言葉がやはり有難い。先師が「身体がダメになつていくということはお浄土に引き取られていつている徴である」といわれたお言葉も尊い。

ただ、残りどれほど生きても、自らの人生において、肉体が死ぬこと以外に、自分の人生に、特別なことは起こりそうもない。それどころか、今まで経験してきたことのいろいろなバリエーションがあるばかりである。だからといって、無味乾燥な人生生活というのではない。むしろ生き甲斐とかエネルギーを感じる。そして見方によると、人生と世界はまことに不思議な〈事柄〉であるともいえる。

無能な私はこれから特に何かをな

せるわけでもなく、真宗の教えは親鸞聖人がすでに明らかにしてくださるが、その後の先達が、言わねばならぬ事は相当語り及んでくださったというが、未来にさらに真宗の教えを豊かに展開する優秀な真宗人が出てくださることを願う。

話は変わるが、ニュースで「日本国民の財布が固く、消費が旺盛でない」としばしばいわれ、政府は国民がもつと消費するようにとハツパをかけている。しかし、三〇年ほど前の消費文化真つ盛りな頃の国民意識と現代の国民意識とは変化があると思う。お金がないから物を沢山買えないので国内の消費が落ちたというよりも、そんなに買う必要がないという意識がだんだん強まってきたのでは無からうか。一方、現代の中国では今や「物を買う」消費にエネルギーを注いでいる人が多いが、それはかつて日本人が来た道である。そういう意味では日本は社会が成熟しつつあるともいえるが、さてこれから日本人は何を求めて生きようとするのか。私たち昭和二〇年始めに生まれたものは、とにかく働いてアメリカ人のような豊かな生活を目指すという、一つの目的があつた。そういう目的は今の若い人には生きる動機となりにくい。若い人には「さあ、あなたは今の人生で本当のところ何をしたいですか、何を実現したいのですか」という問いにまず真向きになつてほしいと思う。

(了)

念佛寺同朋会

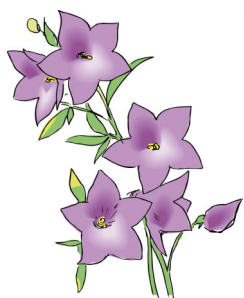
二月二十二日(木)

法話

副住職

土井尚存

*来月の法話は副住職が担当します。



木村無相さんの法信 27

(昭和五十八年九月八日のお便りの続きです。無相さん七九歳。往生される四ヶ月前のお便りです)

それで、「今」、「信心が得たい」の、「ハツキリになりたい」という苦が、モガキが無ければ、アリガタク、又、「先き」になつて、又、「苦」が、「モガキ」が出ようが、それは、又、その時のことで、よいではないですか。

ただ念佛のみぞマコトにておわしますであり、ただ念佛せよ

の「仰せ」「お勅命」だけが、マコトにてましますのであり、「マコトにておわします」というような、「思い」も、どうでもよいことで、ただお念佛申させていただけ

仰せのまんまにお念佛申していたら、たしかに、「まいれる」か、「しかし、はたして、まいれるか、まいらせて下さるのだから」の確認、凡夫、ワレラとしての「確認」たしかめは、いらんでないだろうか。

如来に、「若不生者不取正覚」という、「如来さま」の方に、「確認」「確信」があれば、「如来さまのお手許がハツキリ」してさえおれば、凡夫の方の「確認」や、「念佛申しておれば、キット、まいらせて下さる」というような、凡夫の確信、凡夫の方の「ハツキリ」

は用がないのでなからうか。

ワレ々々凡夫の確認や、確信や、ハツキリは、因縁次第でかわるので、いくら、「確認」しても「確信」しても、「ハツキリ」なつても、最後のタノミには、決してならない。凡夫に属することは、「身口意」の三業に、どれだけ、「アリガタイコト」「タシカナコト」があらわれても、それは、所詮、

ヨロズのこと、みなもて、ソラゴト、タワゴト、マコトあることなしであるから、「ヒツキヨウ依」とはならない。

ただ念佛のみぞマコトにて、おわします。ただ如来、聖人のお勅命、仰せ、のみが、マコトにておわします、で、そう思う凡夫の思いはタノミにならないものゆえ、

「その二つをすてて、ミダをタノム、仰せをタノム、お勅命をタノムのだぞ」といっても、「タノム、思い」をタノム、のではなくて、仰せのままに、ただ念佛せよの、お勅命のまんまに、凡夫の思いに、こだわらず、むしろ、凡夫のいろいろな思いを縁として、

ただ「仰せ」のまんまに、お勅命のまんまに、ただ声に、口に、オーム念佛申す、発音念佛申す、以外の「ミダをタノム」ということも、無いのであるまいか。

ここで、紀さん、もう一度、サダ女の私はどうも信じられませぬ。ウタガイ晴れませぬ、聞こえませぬが、いかが致しましょう。

に対して、香師が「そのまま、称えるばかり」と仰せられたことを、思い出して下さい。

「仰せ」のまんまに
ただ念佛せよの

「お勅命」のまんまに、ただ口に、声に、お念佛、申させていたただくということが、何よりも大切なことであつて、

信じられるとか、信じられぬとか、ウタガイ晴れたとか、晴れませぬとか、聞こえたとか、聞こえませぬ

とかいうような、

ワレワレ凡夫のココロ、凡夫の思いに、属することは、どうでもよいことであり、又、どうでもよくないことであるにしても、ワレワレには、どうしようもないことではありませぬか、ワレワレの「ココロ」「思い」が、どうあるにしても、詮ずるところは、

「よき人の仰せ」
「如来のお勅命」
「乃至十念 若不生者 不取正覚」
の御誓願のまんまに、

ただ念佛申す、より、ホカないのが、ワレワレの「現実」ではありますまいか。

「又、もがき苦しむかも知れませんが」

とあるが、その時は、又、その時の因縁のままに、「もがき苦しんでも」、結極は、又、ただ念佛に帰るホカないことでありましょう。

「果遂」の誓いというのは、自力より他力へという場合、いわゆる入信の時だけの一回だけの

「オハタラキ」だけでなくて、臨終一念の夕べまで、如来の果遂の誓願力にお世話になるホカないのである。

一生涯、如来の「果遂」の「誓願力」に、お世話をかけて、迷うては、引きもどされ、疑うては、本願念佛に立ちかえされて、一生を、すごさせていただくホカはないワレワレ凡夫であるのではあるまいか。

(続く)

平成27年度御年忌年回表

1	周忌	平成26年	亡
3	回忌	平成25年	亡
7	回忌	平成21年	亡
13	回忌	平成15年	亡
17	回忌	平成11年	亡
23	回忌	平成5年	亡
27	回忌	昭和58年	亡
33	回忌	昭和	
50	回忌	昭和	

(23回忌と27回忌をせずに25回忌に
いとなむ数え方もあります。また50回忌
以後は50年ごとになります)